

キャリア発達をめざす総合的な学習の時間
—地域の特性を生かしたキャリア教育—

The Period for Integrated Studies Which Aims at Career Development:
A Career Education That Makes Use of Regional Characteristics

松尾 和宣*

Kazuyoshi MATSUO

抄 録

今日、知識基盤社会の進展、急速なグローバル化が進む中、世界に類を見ない人口減少社会の到来等、我々を取り巻く社会は急激に変化してきている。とりわけ、第4次産業革命とも言われる進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が社会や生活を大きく変えていくとの予測が成されている。予測困難な時代に、子供たち自らが将来を切り拓いていく資質・能力を育てる必要が生じている。このような中で、小学校でのキャリア教育をどのように進めていけばよいのかを考えていきたい。

また、学校は地域社会とともにある。次期学習指導要領の理念でもある「社会に開かれた教育課程」の実現のためには、学校は、地域と子供を結ぶ役割を担う必要性を感じる。

これからの社会が求める資質・能力を分析し学校教育の中に位置づけていくことが求められる。

子供にはみえていない地域の良さを感じ取らせ、地域の一員としての自覚を育ませていく中で、地域の担い手として、豊かな未来社会の実現に貢献する力を育むキャリア教育について述べてみたい。

I はじめに ～子どもたちをめぐる課題～

我が国において、「キャリア教育」という文言が公的に登場したのは、平成11年(1999年)12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中であった。同審議会は、「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と

*神戸市立板宿小学校校長

し、さらに「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言している。

「キャリア教育」誕生には、子供たちを取り巻く社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等、子供たち自身の将来像の捉え方にも大きな変化をもたらしている社会的状況があった。自分の将来を考えるうえで、モデルとなる大人が見つげにくく、希望にあふれた未来を描くことが容易ではないという現実もある。

一人一人の子供を見ると、人間関係をうまく構築することができない。自分で意思決定することができない。自己有用感をもてない。社会に役立つ自分の姿をイメージしにくいといった子供の姿もある。

そのような状況の中、学校における教育活動が、ともすれば「生きること」や「働くこと」に関しての取組が十分に行われていなかったのではないかという指摘もあった。

現在、学校に「キャリア教育」の概念として広く周知されているのが、平成23年(2011年)に中教審が取りまとめた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」である。

II キャリア教育とは

1. キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」

(平成23年1月31日)

「キャリア」(career)の語源は、中世ラテン語の「車道」を起源とされているという。そこから、競馬場のコースやトラックを意味するものになったという。さらに、人が辿る人生、足跡、経歴などを意味するようにもなったといわれる。今では、特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず、「働くこととの関わりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を表すようになった。

2. 「キャリア発達」とは

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」

(平成23年1月31日)

個々の発達段階の中で、自分自身と「働くこと」の関係づけを適切に行い、自律的に自分自身の人生の方向性を定めることが「キャリア発達」である。社会の中で、自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことが「キャリア発達」の過程でもある。

人は、その人生の中で、自己選択・自己判断・自己決定の連続であり、その過程の中で、自己実現に向けて、社会の中で生きようとする。そして、その人生の各ステージにおいて、ふさわしいそれぞれの「キャリア発達」の課題を見出し、その解決に向けて動きを創っていく。小学校教育がめざすキャリア教育の目的はそこにある。

我が国の近未来は、世界に類をみない人口減少社会、知識基盤社会、A I（人工知能）の進化から、予測困難な社会ともよばれる。そのような社会の中で、自分と仲間、自分と社会を見つめる方法の一つとして、キャリア教育は有効な教育であると考えられる。

小学校段階では、小学校入学段階の1年生から、後期義務教育への接続を迎える6年生まで、その発達段階に応じたキャリア発達の課題を設定する必要がある。

【低学年】

- ・身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心をもつ。
家事・小学校で働く人々（管理員・調理士等）
- ・係や当番の活動に取り組み、それらの大切さが分かる。



【中学年】

- ・いろいろな職業や生き方がることが分かる。
自分たちを支える仕事 地域社会の公共施設
- ・係や当番活動に積極的に関わり、働くことの楽しさが分かる。



【高学年】

- ・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。
日本の産業（農業・水産業・工業等）
- ・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦勞が分かる。
- ・学んだり体験したりしたことと、生活や職業との関連を考える。

このようにキャリア発達は児童の成長段階に応じた課題設定と共に、学年進行に伴い前学年、或は後学年との関連性を考慮し、6年間の活動を見通した課題設定が必要である。小学校1年生では、入学以前の幼稚園・保育園との連携を考えた小1プロブレムへの対応も必要である。加えて、小学校6年生では、中1ギャップへの対応を配慮した、接続中学校との連携も重要になる。

Ⅲ 総合的な学習の時間の中でのキャリア教育

キャリア教育は、学習活動すべてに渡り取り組むべきものである。言い換えれば、キャリア発達を視野に入れたキャリア教育の視点で活動を捉えなおせば、すべての教科・領域でキャリア教育は可能になる。学校では、児童実態・地域実態に応じ、各校の教育課題を克服するような年間指導計画を立てる必要がある。教科ごとのねらいや教科の特性を生かしキャリア教育を推進することが可能となる。

ここでは、「総合的な学習の時間」の中での取り組みを中心に、実践例と共にキャリア教育について考察を加えていきたい。

1. 総合的な学習の時間のねらいとキャリア教育

学習指導要領では、総合的な学習の時間の時間を次のように設定している。

目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識・技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようになる。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。
- (3) 探究的な学習に主体的・協動的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

総合的な学習の目標は、大きく二つの要素から成り立っている。

- ・探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うこと。
- ・よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく。

「探究的な見方・考え方を働かせる」ことは、総合的な学習の時間の本質的なねらいと考える。児童は、自分自身の日々の生活中から、様々な疑問や関心が湧き上がってくる。その疑問を解決するための自発的な活動をスタートさせる。課題解決のための情報を収集し、その情報を整理・分析したり、過去に得た経験や知と結び付けたり、あるいは、仲間と知恵を寄せ合ったりしながら、課題解決に向かう。そして、明らかになったこと、知りえたことをまとめる中で、また新たな疑問・関心が産まれてくる。そのような学習サイクルの繰り返しによって、児童の学びが高まってくる。

一方「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」ことは、「探究的な見方・考え方」に裏付けられた学習プロセスの中で、学んだことを自己のくらしや生き方に返していく様子をイメージする。解決が見つからない。解が一つではない課題に対しても、自分が獲得した知識・技術を総合的に働かせ、課題に粘り強く向き合い、解決しようとする意欲であり、予測困難な未来社会を切り拓くためには必要不可欠な資質・能力である。

総合的な学習の時間の目標である、「探究的な見方・考え方を働かせる」「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」は、キャリア教育のねらいと合致するものであり、各教科・領域で推進する可能性とともに、総合的な学習の時間の教育課程上の位置づけで、キャリア教育を推進する合理性を感じるものである。

IV プログラム例 ～5年総合的な学習の時間 「お店を開こう」～

次に、具体的な実践例を紹介したい。

実践例は、神戸市小学校5年生のものである。実践校は、神戸市旧市街地にあり、創立90年を迎える校である。市内でも有数の商店街・市場を校区内に持ち、歴史的に見ても地域全体で学校を支援しよう、子供たちを見守ろうという風土が醸成された地域でもある。

平成7年(1995年)1月17日未明に発生した、阪神・淡路大震災では、激甚な被害を受け、最大2500名の避難者が校内で生活した地域でもある。震災後、地域諸団体の尽力と住民の団結力で復興を果たしたものの、人口減少は今も続いている。地域諸団体・住民の願いの一つは、我が街を愛する子供。我が街を誇りに思う子供。我が街の未来を支える子供。そのような子供像をもち、日々の教育活動にも積極的に支援・参画している。

そのような地域の中で「5年生 総合的な学習の時間 『お店を開こう』」は誕生してから10年を超え、地域・保護者が期待する教育活動になっている。

1. 単元構想

○ねらい

- ・商店街・市場の方々とのふれあいを通して、その苦労や喜びを知り、自分たちが生活する街を愛する気持ちを育む。
- ・経営理念をもって取り組み、自らの将来への夢を開く力を育んでいく。

○時数

- ・総合的な学習の時間 全20時間

○活動の流れ(次頁)

2. 学習活動から

「私たちの街のいいところって何だろう」この問いから、学習活動はスタートする。子供たちは、低学年から、地域の商店街・市場。スーパーマーケット等商業施設や歴史的・文化的施設等、校区の特徴を生活科や社会科で既習している。また、現地学習で話を聴いた地域の方との関わりをとおして、街のもつ温もりも実感してきた。

学んだこと、感じてきたことを学習の中で出し合うことで、校区の特徴である商店街・市場の存在に焦点化していく。実際に、商店街・市場の各店舗に出向き店の方々から聞き取り調査を行う。

- ・どんな人が買いに来るのか
- ・どんなものが売れるのか
- ・売るためにどのような工夫をしているのか
- ・困ることはないのか
- ・苦勞することはないのか
- ・お店を經營していく中で、喜びは何か

質問を店の人に投げかけ、答えを聞くことを通して、各店舗共通の苦勞や喜び、工夫があることに気付く。そして、持ち寄った情報を整理・分析する中で、地域の商店街・市場で働く方の象徴的な姿が浮かび上がる。

実際に、店主・經營者をゲストティーチャーに招き、子供たちに「働く」意味を伝えていく。

- ・信用の大切さ。
- ・笑顔とあいさつが人を結ぶこと。
- ・「働く（はたらく）」ことは、「傍（はた）の人を楽（らく）にすること」
- ・一件、釣り銭を間違うだけで、お客さんは逃げていく。
- ・お金を儲けるだけが喜びではない。
- ・お客さんが、喜んでくれることを考える。
- ・お客さんとのつながりが喜び
- ・お金の流れについて

実際に商店街・市場で商売をされている人の話には説得力を感じる。焦点化された子供たちの現地調査・聞き取りと、商店主の話から、子供たちは「働く」喜びや工夫の一端を感じる。

このような活動を基礎にして、次は実際にお店を開く準備にかかる。グループに分かれ、まず何を販売するかから議論が始まる。

- ・くだもの屋
- ・八百屋

- ・お菓子屋
- ・和菓子屋
- ・お肉屋

等のお店を開くことが決定した。次に、子供たちは店ごとの経営理念・広報・仕入れについて考えを深めていく。仕入れ額で、最大の利益を見込める商品を決定し、校内・地域へのコマース活動を展開する。仕入れに、現金を使うのも本実践の特長の一つである。原資は一店舗につき、2万円である。元手は、地域団体の提供により、利益は子供のものとなる。

仕入れについては、商店街・市場の各店の支援と助言が重要になる。

そして、11月の土曜日の午前中限定で、「お店」は開かれる。当日は、保護者も駆けつけにぎやかな半日となる。早々に売り切ってしまう店もあれば、客足が遠のき、まさに「売る」苦労を実感する店もある。呼び込みや表示方法、陳列の工夫をグループで考え、店主の助言をもらいながら、完売の努力を続ける。

完売した店から、学校に戻り、精算作業に入る。

- ・売れた時の喜びは大きい
- ・笑顔で元気良い掛け声を出すように心がけた
- ・売れ残りそうになった時は、悲しくなってきた。
- ・商売はきびしいけど、やり方によってはおもしろい
- ・グループでトラブルもあったが、お店していたら自然と仲直りしていた
- ・精算が難しい。お金が合わなくて悩んだ

などの子供の感想が聞かれた。

利益については、少額ではあるが、子供たちの提案により、学校図書館への本の寄付と決定した。

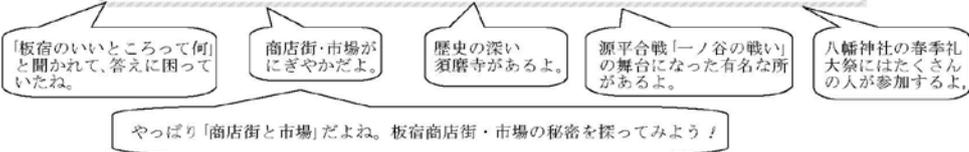
H. 29 5年 総合的な学習 「お店を開こう」 単元の構想（全20時間）

ねらい

- 〇〇〇商店街・市場の方々とふれあいを通して、その苦労や喜びを知り、自分たちが生活する街を愛する気持ちを育む。
- 〇経営理念を持って取り組み、自らの将来への夢を開く力を育てていく。

つかむ
1h

私たちの街「板宿」のいいところって何だろう？



もとめる
1h

商店街・市場で聞き取りをしてみよう

- ・どんな人が買いに来るのか？
- ・どんな物が売れるのか？
- ・売るための工夫って何だろう？
- ・苦労することはないのかな？
- ・うれしいことって何かな？
- ・困っていることはないのかな？
- ……などなど

「働く」って何だろう？ 勤労について考えをまとめてみよう

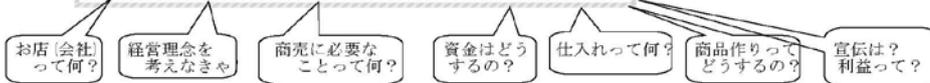
調べたことを聞き合おう。

自分たちにも「お店」をひらくことができるのだろうか？

学び合う
2h

商売の基本を学習しよう

※森の、黒田の、佐野の、西村のに、講話依頼

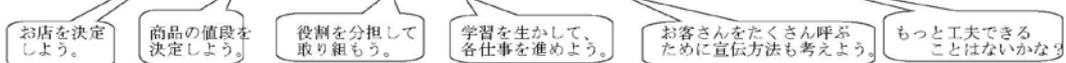


商店街・市場への協力依頼

- ① 開店場所の確保(7ヶ所 ※1グループ6人の7グループ)
- ② 協力依頼店と店の内容決定(7種類※重複可)
- ③ 仕入れ協力店による「各店舗の商品リスト」作成 → 1店舗1〜3万円(7店舗合計で20万円以内)
- ④ 資金の準備(20万円) → 基本：1店舗…仕入れ金2万円+おつり4千円=2万4千円 × 7店舗

広める
14h

お店を決定して、開店準備を進めよう

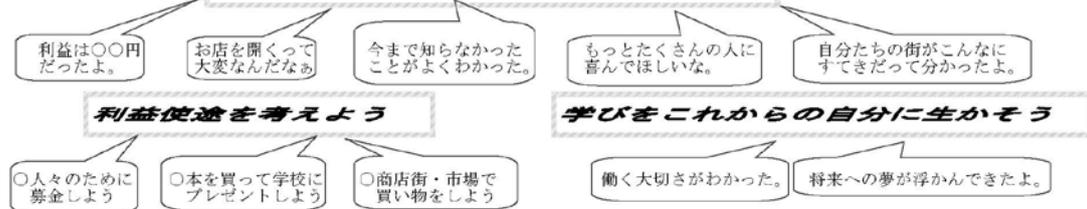


※当日までの準備10h
※当日の活動4h

さあ、いよいよ開店だ

つなぐ
2h

決算報告金を開いてふり返ろう



★未来の自分の「夢」へつなごう★

V まとめ

地域の教育的資産を最大限に活用した実践であると考え。学校・地域・保護者が一体となり、子供の活動を支援する取組でもある。

小学校学習指導要領解説 総則編では、「生きる力」のについて、このような定義を付け加えている。

「加えて、変化が激しく予測困難な時代の中でも通用する確かな学力を身に付けるためには、自分のよさや可能性を認識して個性を生かしつつ、多様な他者を価値のある存在として尊重し、協働して様々な課題を解決していくことが重要であることから、学校教育法第30条第2項に規定された事項に加えて、『個性を生かし多様な人々との協働を促す』ことを示している」

「多様な人々」とは、学校内、学級内の仲間に止まらず、校外、地域社会の世代を超えた人々であると理解する。「お店を開こう」の活動を通して、子供たちは、様々な人との関わりをもち、人とのつながり、社会へのひろがりを経験した。これこそが「キャリア教育」の本質であると考え。

多様な人との関係性の中から、労働観・勤労観のみならず、「生き方」を子供たちは学んだことであろう。予測困難といわれる未来社会を切り拓き、子供たち一人一人が未来の創り手となるための、一つのアプローチとして「キャリア教育」は価値ある教育であると考え。

参考文献

- 1) 『小学校学習指導要領解説 総則編』 文部科学省、2017年（平成29年）6月
- 2) 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 文部科学省、2017年（平成29年）6月
- 3) 『「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて～新学習指導要領全面実施への参考～』 全校連合小学校長会、2017年（平成29年）7月
- 4) 『キャリア教育の推進～自立して未来に挑戦する ひょうごっ子！～』 兵庫県教育委員会、2015年（平成27年）3月

Abstract

In recent years, there has been a tendency of social rapid change, such as the development of knowledge-based society, the progression of declining birthrate and aging population, and the advance of information society. For these reasons, it has become necessary to develop children's abilities to explore their future by themselves. Then, the author would like to study the way of practicing career education at elementary school.

School shares the fate with community. It is necessary for school to play the role of connecting children with community to realize the idea of "open curriculum to community" in the next study of course. It is also required to analyze abilities that future society demands, and to place them in school education.

In this paper, the author considers the way of carrier education which raises the ability of children as future regional leaders to contribute to realization of prosperous future society.